私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、
学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。
今回は柳田早織講師と近藤啓講師のお二人に、
当時の様子を語っていただきました。

私の学生時代

リハビリテーション科学部
言語聴覚療法学科
講師　柳田 早織

私は本学言語聴覚療法学科を2007年に卒業しました。学部生時代のことを書こうかとも思ったのですが、こちらでは学生時代で一番充実していて思い入れのある博士課程の学生時代を振り返りたいと思います。私が北海道大学大学院医学研究科に入学した2014年頃は、ちょうど私の研究テーマでもある「痙攣性発声障害」に関する臨床研究が立て続けに実施され、ご指導をいただいていた西澤典子教授（本学リハビリテーション科学部）から「今、この波に乗らないと!」と強く後押しされ、受験を決意しました。入学1年目は既定単位数の修得に追われる日々で、夜間開講される科目を優先的に選択した結果、泌尿器科の病棟へお邪魔するなど貴重な体験ができました。

入学と同時に、福田諭北大名誉教授から「週1回は外来にも出るように」とご指導いただき北大耳鼻科の音声外来への参加がきっかけとなり、外科的治療が必要な音声障害を含めたあらゆる音声障害の臨床に関わるようになりました。さらに痙攣性発声障害に関する治験が北大病院で実施されていたことから音声評価を担当したり、手術室へ入って患者さんに手が届くほどの至近距離で実際の手術手技を見学する機会を頂き、溝口兼司先生と畠山博充先生には大変感謝しています。また、フィリピンから1年間研修に来ていたMilabelle Lingan医師との思い出もとても心に残っています。彼女はいつも私のつたない英語を熱心に聞いてくれ、学問的な話から他愛もないことまで外来や医局でたくさん話しました。あれから5年近く経ちますが今でも日本で災害が起こるたびに心配して連絡をくれたり、お互いの近況を報告したりと交流が続いています。学位の取得にあたり、北大耳鼻科医局員の先生方、秘書さん、そして何より論文指導をいただいた本間明宏教授には感謝しかありません。この経験を通じて得られた恩師たちとのご縁や経験をこれからも大切にしていきたいと思っています。

2014年当時の北大耳鼻科音声外来のメンバー、左から2番目が私。

私の学生時代

医療技術学部
臨床検査学科
講師　近藤 啓

白衣を着て、試験管を振って、理科の実験みたいでおもしろそう、そんな適当とも思える動機で入学したのは、西野学園札幌医学技術福祉専門学校の臨床検査技師科でした。

専門学校は朝から夕方までびっしりと授業が組み込まれ、特に、1年生の時は座学がほとんどのため、高校生活とあまり変わらない感じでした。2年生になると学内実習が始まり、採血実習で採取した自分の血液を使って生化学検査や血液検査の実習、細菌培養、病理組織標本の作製、心電図をはじめとする生理検査などなどさまざまな学内実習をグループの仲間とワイワイ楽しくやっていましたが、その後のレポート書きがとにかく苦手でした。

学校の向かいには名物のお寿司屋さんがあり、お昼は学生用に500円メニューを用意してくれていて、生ちらしや鉄火丼、天丼など、どんなに大盛りにしてもお値段据え置きで、大食いの学生時代には非常に助かりました。今より贅沢なランチを食べていましたね…。

学校以外では遊んでばかりの記憶しかありません。友達の4畳半の部屋に10人ぐらい集まり、安い焼酎で宅飲みしたり、徹夜で桃鉄やったり、友達とバンドを組んでスタジオで音を鳴らしたり、温泉旅行に行ったり、お花見でバーベキューしたり…今考えると仲間に恵まれた学生時代でした。

3年生になるとさすがに遊んでばかりはいられません。病院での臨床実習が始まります。4月から夏の終わりまでの長期実習であったと思います。私は、国立札幌病院（現北海道がんセンター）の臨床検査科でお世話になりました。そこでの諸先輩方の指導を受けながら現場での臨床検査を学び、同時に人に教えるということにも興味を抱きました。

専門学校を卒業後、札幌医科大学附属病院に就職し、病理検査をはじめとするさまざまな検査業務を経験し、病院実習にくる学生の指導にも携わることができました。就職してから5年が過ぎたころに、社会人大学院制度を利用し札幌医科大学大学院医学研究科に入学、働きながら4年間の大学院生活を送ることになります。毎日、日中は臨床検査業務をこなし、夜は研究業務を行いました。朝まで実験をし、そのまま仕事を行う日もありました。正直、辛い日々ではありましたが、あの時があって今があるのをとても実感しています。

数少ないライブの時の写真。
本来はドラムなんですが…右から2人目が私です。

病院実習での一コマ。人生で一番痩せている時ですね。